

第 135 号

平成 12 年 12 月

E-mail : © 2000
shimz@mb.intoweb.ne.jp
LDG04167@nifty.ne.jp

SC だより

編集 発行 人

清水 吉男

(株) システムクリエイツ

横浜市緑区中山町 869-9

電話 045-933-0379

FAX 045-931-9202

ソフトウェア開発の原則

「ソフトウェア開発 201の鉄則」から 53 かい

最終回

4 年あまりの長期にわたって、「201の鉄則」の解説を続けてきました。その結果、原著の項目の 1/4 を越える項目を解説することになってしまいました。この本は、おそらく多くのソフトウェア開発の関係者に読まれていることと思われそうですが、その人たちに少しでも役に立つことができたずれば、私としても、嬉しいかぎりです。

しかしながら、50 回を越えたこともあって、原著の項目の中での主な部分は、概ね解説し終えたのではないかと思います。また、この間の時代の変化もあって、新しいテーマも私の前に現れてきたので、「201の鉄則」の解説も、このあたりで一旦終えることにしたいと思い、今回は最終回としました。

最終回では、もう一度、この本の意義や、この種の本の読み方などについて整理しておきたいと思います。また、「50 回」目の「原理 4-1 = 今すぐ要求仕様書の誤りを直せ」のところで、解説が不足していましたので、ここで、補足しておきたいと思います。

原理 4-1 の補足

原理 4-1 は、「要求分析の原理 = 今すぐ要求仕様書の誤りを直せ」というものでしたが、これには非常に大きな意味があります。要求の誤りに気付くのは、主として 3 つの場面です。一つは、要求仕様のレビューのタイミングで、この場合は、もともと要求仕様を書いていた流れがあるために、仕様書の修正にはあまり抵抗はありません。2 番目は、要求仕様を受けて設計に入ったところで、仕様の不足や矛盾に気付くという場面です。ただ、現実には、「設計」という作業が省かれていることが多いため、この機会は明確ではありません。3 つ目は、テストによって、仕様書が漏れていることが判明したときです。この場合、構成管理（変更制御）が行き渡っていない組織では、目の前のソースの修正が優先されるため、要求仕様書の修正が“後回し”になります。

この“後回し”が確実に実行されれば良いのですが、実際には、実行されないまま放置されることが多いようです。でも、ここで書き直されないために、多くの人は、次の機会でも同じ過ちを繰り返すことになるのです。仕様の誤りと言っても、単なる誤記や値の違いなどの場合は修正に支障は無いのですが、この機能が実行される際の条件の定義が抜けていたり、ある状況でのパフォーマンスの規制が抜けていたというような場合、実は、間違った要求仕様書に追記できないことがあります。

ソースが修正されたのだから、要求仕様書への追記も問題ないと思って、いつでも訂正できていると思っていることが、“後回し”の根拠と成っているようですが、実際に仕様書に書いてみれば直ぐに分かります。もともと適切に構成されていないければ、そのことを何処に書けば良いか迷ってしまったり、どのように書けば良いか困ってしまいます。特に、そのような記述を漏らした分ですから、仕様書がうまく構成されていないと考えられますので、この種の仕様の追加や訂正が、スムーズに行かないことが少なくないのです。

前提事項を追記するために、仕様書の構成を変更したり、整理し直す必要が出てくる場合があります。このステップを経て、はじめて次回には同じ過ちをしないう確率が高くなるのです。

つまり、今回漏らした仕様が漏れることなく考えられる仕組みを手に入れることになります。このステップを経ないかぎり、毎回、同じような前提事項のモレを繰り返してしまうのです。

この本の意義と読み方

「201の鉄則」は、じつに多くの示唆を含んだ本です。幾つかの場面に分類され、そこで起きる問題を整理して、“このような過ちを侵そうとしていないか？”と、問い掛けてくれます。実際に、一人のエンジニアが、201 項目の全てが必要になるわけではありません。今回、解説してきたように、1/4 程度で十分足りると思います。

問題は、この本をどう読むかです。少なくとも「読んだことがある」という状態では、ほとんど意味がありません。せっかく、分かりやすい工程単位で分類されているのですから、やはり、実際の作業に入る前に、その工程において、この本に書かれていることに遭遇する可能性があるかどうかを検討し、危険な項については具体的に対応する方法を考え、実施していただきたいものです。あまり多くを一度に取り組みうとすると、うまくいかない可能性が高くなってしまいますので、それぞれの工程ごとに、2~3 の項目に絞っての方が良いでしょう。

う。そのかわり、それらの項目については、前の状態から「変化」させることになります。

小さな体験を

『実際に体験したことと、自分の頭で考えたこと以外は、いざというときに役に立たない』

これは、私の基本的な姿勢であり、今日まで、この方針を貫いてきたつもりです。新しい手法も、早く帰って自宅でやってみることで手に入れることができました。201の鉄則も、一つの項について、実際の作業の中にどのように取り入れるかというところまで具体的に考えます。場合によっては、テンプレートや取り組みの方針書なども、その時点で用意します。このように、自分の頭で考えたり、事前に「ミニ体験」することで、ようやく本番の作業に使うことができるのです。

このような読み方は、何も「201の鉄則」に限ったことではありませんが、「鉄則」は、要領良くまとめられていますので、取り組み方を考える行為に入りやすいはずで、同じようなことを一般の文献で行うには、まず、その節で何が述べられているのか、そして何をすべきなのか、と言ったことを読み取らなければなりません。

文章を読むということは、著者の頭の中を歩き回ること、そのままでは、自分の頭で考えたことにはなりません。そうして著者の頭を散歩しているうちに、自分の頭で考えるという本来の目的を忘れてしまう可能性があります。特に、このような読み方が身についていない状態では、その危険が高いのです。その点、「201の鉄則」は、予め要領良くまとめられていますので、著者の頭の散歩から早く開放されて、本来の目的に戻りやすいのです。

どうか、このような本を大事に読み込んで頂きたいと思います。そして、同時にこの種の文献の読み方というものに身に付けていただきたいとおもいます。一人でも多くの方が、適切なソフトウェア開発のあり方を身に付けることに、少しでも役に立てることを願って、この企画を終えることにします。

長い間、お付き合いいただいていたありがとうございます。

【完】



派遣社員頼みの“いびつ”

▲ 99 年度の派遣社員の総数が 100 万人を超えたという。しかも前年度比で 19.3% も増えている。企業が正社員から派遣社員に切り替えたことを物語っている。しかしながら、派遣会社の売上高は 7% 減少して、派遣会社間の競争が激しくなってきたようだ。

▲ 確かに、この間の企業の収益が増加に転じていて、政府をして、景気が回復傾向にあると言わせているが、その背景にあるのが、派遣社員への転換である。99 年から 2000 年にかけての企業の増収は、一部の業種を除けば、ほとんどがリストラ効果である。

▲ この急激な変化の背景にあるのは、経営者の横並び感覚と、企業側に解雇権がないことが上げられる。法的には事前通告で解雇が出来るのだが、過去の判例によって、実質的に法律が否定された形になっている。契約期限付きの社員であれば、その問題が生じないものである。

▲ 解雇に関して企業に出来るのは、簡単に言えば倒産ぎりぎりの状態で「希望退職」を募ることぐらいである。その場合は、有能な人から辞めていく傾向があり、その後の競争力を大きく損ねることになる。だから陰湿な方法に走ってしまう。

暁鐘の音

118

勉強しない大人

「IT革命」という言葉が今年の流行語に選ばれたが、その実態はお粗末ながりである。確かにコンピュータは、ある程度個人に対して普及している。だがその使い道とは問えば、「IT革命」とはほど遠い。「IT革命」というのは、単にパソコンが普及すれば良いのではない。パソコンをどう使うかが問われるのである。年賀状の編集と「IT革命」とは何の関係もない。

一方では、学校教育に於ける学力の低下が問題になっていて、教育基本法も含めて改正しようとしているが、それよりも、大人が勉強しなくなったことの方が、問題としての影響が大きい。家庭にあつて、勉強する姿を子供に見せないままでは、何も解決しないだろうし、そのままでは、社会にとつても「荷物」になってしまふ。

実は、インターネットや「IT革命」の意義の一つは、ここにある。同じような仕事でも、新しい環境を活用して、もっと簡単に済ませてしまふことによつて、社会に貢献するのである。空いた時間は、さらに仕事をして、家庭やボランティア活動に使つても良い。それでも生産性は落ちていないのだから、もちろん、一層の勉強に使つても良い。特に、少子高齢化が急速に進行する我が国にあつては、より長く「現役」で活躍できる状況にも貢献する。「現状」のままでは、必ず新しい時代にとつて障害となる。必ず、新しい時代を知り、そこで活躍するための勉強や訓練が必要になる。インターネットや「IT革命」は、そこに寄与しなければならない。

もし、大人たちが、このように動き出せば、日本の公的サイトに、何と自由に入手できる有用な情報が少ないことかと怒りだすはずだ。アメリカでは、「税金」が投入されている組織がある。

「IT革命」といつて日本中にケーブルを張り巡らしても、そこに「自己紹介」しか見るべきものがないのでは、インターネットで勉強することもできない。そうすると、「英語」を自由に使える人との間で、大きな「インターネット・デバイド」が生じることになる。

「IT革命」の前提となるのがインターネットである。そのインターネットが安価で高速にならなければ、「IT革命」は始まらない。だが、我が国では、長くNTTが「回線」を支配してきたことと、「ISDN」を普及させるという既定方針から、すぐにも高速通信が実現する「DSL」という方式の普及が遅れたことが影響した。その結果、インターネットの利用が進まず、アジアの国々からも引き離されてしまつたという結果になった。

だが、ここで「IT革命」にとつてもう一つ問題がある。それは、大人が勉強しなくなっていることである。家に帰って、知識や見聞を広げたり、自分の仕事の技術を向上させるための勉強をしなくなった。サラリーマンの一月の小遣いが、この5年間で二万円以上減少していて、本を換えるかもしないが、だとすると、なおさら「じり貧」に陥つてしまふ。いや、それよりも、家で勉強する必要性そのものを認識していないのではないかと思われる。

一方では、学校教育に於ける学力の低下が問題になっていて、教育基本法も含めて改正しようとしているが、それよりも、大人が勉強しなくなったことの方が、問題としての影響が大きい。家庭にあつて、勉強する姿を子供に見せないままでは、何も解決しないだろうし、そのままでは、社会にとつても「荷物」になってしまふ。

一方では、学校教育に於ける学力の低下が問題になっていて、教育基本法も含めて改正しようとしているが、それよりも、大人が勉強しなくなったことの方が、問題としての影響が大きい。家庭にあつて、勉強する姿を子供に見せないままでは、何も解決しないだろうし、そのままでは、社会にとつても「荷物」になってしまふ。

一方では、学校教育に於ける学力の低下が問題になっていて、教育基本法も含めて改正しようとしているが、それよりも、大人が勉強しなくなったことの方が、問題としての影響が大きい。家庭にあつて、勉強する姿を子供に見せないままでは、何も解決しないだろうし、そのままでは、社会にとつても「荷物」になってしまふ。

いよいよ21世紀へ

1989年10月に「SCだより」の第1号を発行して以来、すでに12年目に入りました。当時、小学校の入学前だった下の娘も、来春は大学生です。同じ時計で、私自身も20世紀の半分余りを生きてきた勘定になります。そして、あと1週間で21世紀の幕を開けることになります。

さて、21世紀というステージの中で、私自身、どのような役割を担うか。いや、その前に、私自身がどのような役を担えるかを問わなければならない。そして、その役を担うための準備を怠っていないことを確認しなければなりません。

「ああ、面白かった」この言葉を最後に吐くこと。これが私たち夫婦が合意していることです。それに向かつて、自分に偽らない人生を送ること。そして既に居ないが私を生んでくれた両親に、正面から向き合えるように生きていくこと。その気持ちで、今日までの私自身を支えてくれたことに感謝すると同時に、私に活躍の場を与えてくださった多くの皆さんや社会に感謝して20世紀を終えたいと思います。

21世紀が、皆さんにとつても素晴らしい世紀でありますことを祈って止みません。